

## あなたがたこそ世界の光

(マタイ五・一四〜一六)

間もなく夏本番。夏と言えばやっぱり花火だ。諸所で行われる花火大会では打ち上げ花火や仕掛け花火が夜空をあざやかに照らしだし、多くの人の目を楽しませる。最近ではひたすら花火を愛でるテレビ中継まであるほどだが花火が放つ光はそれほど魅力的である。色とりどりで形も豊富、遠くからもよく見える。闇夜に輝く光は人の心にも火を点けるのだ。

今朝の聖書箇所はよく知られた山上の垂訓の一節であるが、イエスはそこでイエスの信奉者たちを世界の光と呼び、同時に彼らが果たすべき務めについて教えている。以下に三つのことを学びたい。

### 一、キリスト者こそ世界の光

一四節には「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。」とある。イエスは、ご自身の弟子達を「世界の光」と宣言されたのだ。時に一四節はギリシャ語では強調構文である。だからここを「あ

なたがたこそ、世界の光なのです」と訳すことも可能だ。世の光とはほかの誰でもない、キリスト者である私たちの姿である。この使命は旧約聖書の時代には、イスラエルが担っていたものだったが、イエス・キリストのこの世界への突入後はイエスの弟子たちにこの使命は託されたのである。

光は方向性を示すものである。同じように真のキリスト者は、良い行いによって方向性を示す。世にあつて、その行いによつて神様とその性質を指し示すのだ。もつとも良い行いは救いの条件ではなく、救いの結果であることは言うまでもない。またもう一つ知らねばならないことがある。それは私達キリスト者は自分で光を放つことが出来ないということだ。私達の光はどこまで行つても、キリストの反映であり、その意味において私たちは「世界の光」となるのだ。

### 二、光を隠してはならない

続いてイエスは「また、あかりをつけて、それを柀の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。(一五節)」と言われ、前述の「光」を「燭台のあかり」に具体化して説明を試みる。「燭台のあかり」とはキリスト者の「良い行い」を指す。良い行いは、オイルランプに火

を灯し、それを隠さずに、部屋全体を照らすことに似ており、私たちが神様の御心にかなう行動をしていく時、その行いが周囲の人たちや、闇である世を照らすことになるというのだ。クリスチャンは、イエスを受け入れた時、救い主なるイエス様の光を内に与えられる。だからこそイエスから頂いたこの光を隠したり、輝かせないでいてはならない。私たちは光を世に輝かせていく使命を神から受けたことを忘れてはならないのだ。

### 三、光を輝かせるには

続く一六節には「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたをたのしい行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」とある。しかし私達はどうしたら、神の輝きを周りの人々に反映し続けることができるだろうか？そのためには、私たちは自分の内側、もつと詳しく言うならば、品性、態度、言葉、行動を通して、イエスの光を周りの人々に反映し続けることが大切である。

そこでカギになるのはここに出て来る「良い」という言葉だ。この言葉には一般的な「良い」という意味だけではなく、「美しい」とか「魅力的」であるという意味も含んでいる。そう考えると私たちはキリスト者の態度や行為もまた魅

力に富んだものであるべきだ。しかしそれは生身の人間にできることではない。むしろまことの光であるキリストを信じ、イエスに従い続け、キリストから光を受け取っていくことが何よりも必要なのだ。そして神の愛の心で、自分を見つめ、キリスト者同士を尊敬し、理解し、励ましながら、成長していくならば人々はその行いをよいものと認めるようになる。つまり証が立つのである。その時に起こるのは神への感謝と礼拝である。キリストの光が失われている人を照らしますのだ。

\* \* \*

私には一人の友が居た。彼は高校のクラスメイトだった。当時少々引つ込み思案だった私はなかなか友人が出来ず、孤独な学生生活を送っていた。そんな私を見たこの友人は、彼の方から積極的に近づき、私の友になってくれた。イエスのように友無き者の友となり、苦しみ、混乱していた私を励ましてくれたのだ。私はこの友人の中にキリストの光を見た。そして感動と共に洗礼を受け、キリスト者になったのだ。イエスは言われた。「あなたがたこそ世界の光である。」と。さあ私たちが神の愛の光を掲げ、善い行いを通して、多くの人に父なる神の愛を知っていたかどうかではないか。